今も広い背中を仰ぎ見て

昭和五十四年三月卒業　大辻永

羽田先生に理科を教わったのは三年生からだったと思うのですが、初めて受けた授業は、実は二年のある春の日だったように思います。担任の田崎先生が出張でご不在だったのでしょう。代わりに「理科の専門の先生」が特別に教えてくださる日が一時間あったのです。内容は、アブラナの観察でした。簡単なスケッチと気づいたことを書く、という課題だったように思います。

校舎の前の花壇に咲くアブラナ。見るからにおっかなそうな先生がその脇に立ち、出来た順に持って行きます。考えてみれば、人生の中で、初めて男の先生に教わる瞬間でもありました。「観察する」ということがどういうことかも、わかりません。

「一番に持っていって褒められよう」。

と思った矢先、誰かに先を越されました。もう中身で勝負するしかありません。先生の顔色をうかがいながら、恐る恐るノートを差し出しました。

「葉がねじれるように出ている」。

二年生には必死の表現だったと思います。眼鏡をはずし、じっくりスケッチを見て、

「いい目をしている」。

と羽田先生はおっしゃられました。

安堵と同時に理科が好きになり、また、真っ直ぐ取り組むことの大切さを覚えました。

ジャングルジムに登ったり、砂場で相撲をとったりしていても、それまでは、となりの学校園（畑）で作業する先生は気になりませんでした。この授業の後、躊躇せずに声をかけられるようになりました。

ある日、先生は玉のような大汗をかきながら、畑に深い穴を掘っていらっしゃいました。聴くと、土の上下を入れ替えているのだそうです。まだ小さい自分は手伝うことも出来ず、「そんなことまで。こんなになって」と、泥だらけになりながら黙々と作業される先生の姿を、ただ神妙に見つめているだけでした。

大宮小学校を卒業する時に書いた将来の夢は、「羽田先生のような中学校の理科の先生」でした。いつか追い抜かしてやろうという気持ちもあったのでしょう。そして今、理科教育という方面から、小学校の先生を育成する立場に立っています。その目指すところは、当然羽田先生。自分を勘定にいれず、子どものために、文字通り子どもと共に生きていらっしゃった羽田先生。先生の広い背中を今も仰ぎ見ながら、日々奮闘しております。

（『羽田一正先生追悼文集』 2012.6.22）